

第 8 章 本事業の主な成果に関する総括

8.1 本事業の中心となる 4 つの人材像とそれを支える教 学体制

本事業では、理系産業人育成のため、4 つの育成すべき人材像を立案した。さらに、その 4 つの人材像を実現するために必要となる、教学体制の構築との関係について、図 8-1（図 1-4 再掲）に整理した。

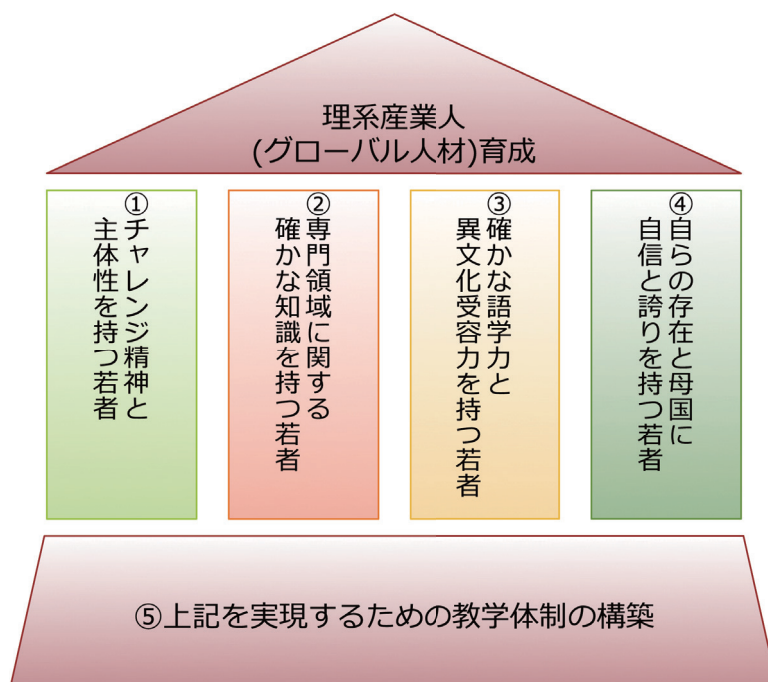


図 8-1 . 4 つの人材像とそれを実現する為の教学体制の構築（図 1-5 再掲）

次節では、昨年度と同様に、図 8-1 に示した○番号を参照しながら、各章で述べた、各下部 PT にて得られた成果を本事業全体として概観する。

8.2 各下部 PT で得られた成果と本事業全体との関連

表 8-1 では、左列に下部 PT の名称（ただし、「グローバル・サイエンス・コース / イングリッシュ・キャリア専攻整備 PT」を「GSC」、「グローバル・ビレッジ PT」を「GV」、「教学グローバル化 PT」を「教学」、「事務グローバル化 PT」を「事務」、「入学グローバル化 PT」を「入学」、「調査・研究 PT」を「調査」と略記する）、左から 2 番目の列に各章で述べられた成果、右列から 2 番目の列に図 8-1 のうち、関連する要素の番号を示し、最も右の列に本報告書内の節番号を示し、本事業で得られた成果について、各成果の関連性を見る。

8.3 次年度の実施計画

本事業の次年度の実施計画についても、引き続き、グローバル化推進プロジェクトチーム（親 PT）が、申請書に書かれた構想が迅速に実現されるように、下部 P T ごとの作業内容の承認

表 8-1 各成果と本事業全体との関連性

PT名	成果	図8-1との 関連	節番号
GSC	グローバル・サイエンス・コース	①②③④	2.3
GSC	イングリッシュ・キャリア専攻	①②③④	2.4
GSC	英語力の向上	③	2.5
GSC	留学の促進	③①④	2.6
GSC	キャリア教育・インターンシップの拡充	①④	2.7
GSC	広報発信	⑤	2.8
GV	ラーニングコモンズの取り組み	①④	3.2.1
GV	グローバル・ビレッジプロジェクトの活動	③①	3.2.2
教学	教学改革プランの全体像	①⑤	4.2.1
教学	シラバス・成績評価改訂	⑤	4.2.2
教学	科目ナンバリング調査・導入	①⑤	4.2.3
教学	TOEIC 義務化・公表、英語仮ユラム GJP（グローバル・ジャパン・プログラム）強化（英語力向上）	③④⑤	4.2.4
教学	履修計画相談、履修登録システム開発、自学自習英語eラーニングシステム	①③⑤	4.2.5
事務	学内文書の英文化	⑤	5.2.1
事務	事務職員の外国語力養成関連	⑤	5.2.2
事務	グローバル事業の体制構築関連	⑤	5.2.3
事務	グローバル職員ロールモデル作成関連	⑤	5.2.4
入学	高大連携の英語教育に関するFD	⑤	6.2.1
入学	入学センターデータの一元化	⑤	6.2.2
入学	外国語学部英語1科目入試改革検討	③⑤	6.2.3
入学	入試制度との関係の整理	⑤	6.2.4
調査	学生スタッフの充実による学生参画の大学運営体制の強化	①③	7.2.1
調査	大学の方針とデータに基づく本事業の自己点検体制の強化	⑤	7.2.2
調査	教員評価制度への改善活動及び教員と職員の境界領域に属する人材獲得へのアプローチ	⑤	7.2.3
調査	教育情報の公開	⑤	7.2.4
調査	全学FD/SD研修会の企画と実施	⑤	7.2.5

及び作業進捗の把握等の総括を行って推進する。

各下部 PT の次年度の実施計画、及び本事業の一部であったラーニングコモンズ/グローバルビレッジ PT から派生して設置された委員会である、ラーニングコモンズ運営委員会の次年度の実施計画は次の通りである。

8.3.1 グローバル・サイエンス・コース/イングリッシュ・キャリア専攻整備 PT

- (1) 昨年度にシステム整備を完了した e ポートフォリオを用いて、グローバル・サイエンス・コース登録生に、入学時から卒業時までの学習成果物を保管し、学習成果の振り返りを促す。利用者のフィードバックをもとに、システムと運用方法の評価と改善を行う。
- (2) 大学の経常費用により、理系 3 学部と外国語学部の学生を優先的に対象とした 1 人 15 万円を上限とした渡航費奨学金を運用し、さらに各種奨学金制度の活用によって留学費用の負担を軽減する。留学を促進するとともに、学部カリキュラムとの連動を図る。
- (3) 理系産業人の育成に関わる 4 学部の英語力到達目標達成にむけて、自発的に学習できる自学自習英語システムを昨年度に引き続き利用する。必修英語科目などと連携し、効果的な利用を促進する。
- (4) 同窓会組織等を活用し、東アジア・東南アジア等の調査を行い、協定校との連携の強化を図り、留学生受け入れ条件の調整、海外インターンシップの拡充を図る。
- (5) 理系企業を中心とした国内外ネットワークを構築する為、卒業生の就職先や確かな技術を持つグローバル企業について調査を行う。京都の経済界・同窓会組織を活用した理系インターンシップ科目を開講し、産学協働による理系専門知識の教育を行う。学生のキャリア形成を支援し、理系 3 学部のインターンシップ履修率の向上にむけた取組を行う。
- (6) 理系特別英語プログラム、グローバル・ジャパン・プログラム等、英語科目を開講する(25 科目)。
- (7) 既存の理系学部専門英語科目(10 科目)に加えて、コンピュータ理工学部において既存の専門科目(1 科目)を英語利用に重点を置く内容として開講する。なお、英語科目による授業の実施については、グローバル化推進室に配置された教育職員を活用する。
- (8) グローバル・サイエンス・コースを対象とした短期・長期留学プログラムを追加開発する。短期留学については、既存のプログラムに加えて、新規にイギリス・東アジア・東南アジア等へのプログラムについて検討する。長期留学については、学部専門科目履修と留学の両立のための環境を整備し、大学院進学予定者向けの教育など学部のニーズに合致した教育プログラムの開発・調査を行う。
- (9) 理系 3 学部と外国語学部の学生対象の夏期集中科目「特別英語 (英語サマーキャンプ)」を昨年に引き続き開講する。前年の実施の経験を踏まえて、外国語学部と理系 3 学部が連携し英語力向上と学生の意識向上を図るための施策を実施する。
- (10) グローバル・サイエンス・コースを対象として、キャリアパスを考察する動機付けのための、産学協働教育を核にした海外留学プログラム、「海外サイエンスキャンプ」科目を昨年に引き続き開講し、理系産業人の育成のための教育を米国西海岸で行う。
- (11) グローバル・サイエンス・コースおよびイングリッシュ・キャリア専攻のホームページ等の広報を展開し、本学の取組を外部に発信する。

- (12) グローバル・サイエンス・コースを対象として、英語学習のセミナーを開催する。春休み期間等を利用して、正課教育との両立を図るとともに、「海外サイエンスキャンプ」等の留学プログラムに参加できない学生にも、集中的な英語学習の機会とする。
- (13) グローバル・サイエンス・コースを対象として、月1回程度を目標に定例勉強会を実施し、コース登録者のコミュニティ形成と主体的な学びへの意識づけを図る。
- (14) グローバル・サイエンス・コースを主な対象として、国内外の講師を招聘しグローバルな理系キャリアに関するセミナーを開催する。春休み期間等を利用して、正課教育との両立を図るとともに、「海外サイエンスキャンプ」等の留学プログラムに参加できない学生にも、グローバルな体験を供給する機会とする。

8.3.2 グローバル・ビレッジ PT

- (1) 平成26年度に引き続き、レイアウト設計、什器選定、教材・資料選定および運用方法の検討に関しての具体的議論を、平成28年4月のオープンに向けて行う。
- (2) 平成26年度試行の英語ワークショップの成果を踏まえ、授業と連携したワークショップの試行を開始する。
- (3) 平成28年2月の新2号館竣工に向けて、名称の決定および広報媒体の作成および配布準備を開始する。
- (4) 雄飛館ラーニングコモンズにて、外国語（英語）によるアクティブラーニングセミナーを実施する。
- (5) 英語ワークショップの試行結果を分析し、平成28年4月の運用開始に向けて、モジュール開発の検討を開始する。

8.3.3 教学グローバル化 PT

- (1) ポートフォリオを全学部生用が活用できるよう開発に着手し、蓄積した学生の学習成果の達成度や進捗を、担当教員による履修計画相談にも活用できるよう検討する。履修計画相談に有用なルーブリックについて検討・調査する。
- (2) 入学時にプレースメントテスト（TOEIC Bridge）を実施し、全入学生に関するデータの蓄積、およびデータに基づいた教育改善を行う。
- (3) 第2 Semester 終了時と第4 Semester 終了時に TOEIC IP のテストを実施し、入学時のプレースメントテスト（TOEIC Bridge）との比較により伸び率を確認する。また、授業内容の改善資料とする。
- (4) 履修要項・シラバス等の教学文書の英文化を進める。

8.3.4 事務グローバル化 PT

- (1) これまでの英文化の取り組みを振り返り、平成25年度に発掘した学内英文化ニーズを例に取り、学内で対応する組織体の在り方について検討する。
- (2) SD の観点から、グローバル職員のロールモデルを作成し、効果的な活用方法について検討する。
- (3) 職員英語力向上のための研修会を、引き続き実施する。

8.3.5 入学グローバル化 PT

- (1) 入学センター（入学試験委員会）と教学センター及び各学部と連携し、各部署に点在する学生データを一元的に統合し分析するための予備調査を行う。入口から出口までの学生の成長をデータで示し、本学学生の特徴を抽出する方法論についての、ケーススタディと位置づける。
- (2) 高等学校と大学の学びをつなぐ試みとして、26年度に本学附属高校と英語教育に関する高大連携FD研修会を行った。入試制度改革の大きな流れの中で、高大連携の重要性が増していることを念頭に、他大学事例や、学内で実施されている各種の高大連携事業との比較考察を行う。

8.3.6 調査・研究 PT

- (1) FD/SD セミナーを引き続き実施し、本学の教育の質向上を行う。
- (2) 専門職員の職域や雇用形態に関する実態を調査し、冊子体に纏め、発行する。この冊子では、教員の教育力評価についても触れる。
- (3) 理系学生のためのPBL授業について、現状の実習系授業に関する授業ノウハウ等の意見交換会を行い、学内への浸透・質向上を行う。
- (4) 外国語学部と理系3学部のTOEICスコアの分析を行い、指標の達成度合いについて議論する。
- (5) 全国400の大学・高等教育センター・研究所等へ配布している『高等教育フォーラム』で成果報告を行い、教育支援研究開発センターのホームページでも情報発信を行う。質保証に関する研究蓄積を広く他大学へ公開することで、私立大学における高等教育センターのモデル形成を行う。
- (6) 最終年度である、平成28年度に向けて外部評価委員会を引き続き実施する。

8.3.7 ラーニングコモンズ運営委員会

- (1) 雄飛館ラーニングコモンズにおいて、平成26年度より雇用を開始している日本語ライティング支援担当の専門職員が中心となり、キャリア科目「自己発見と大学生活」をはじめ、ライティング・プレゼンテーションに関する授業と連動した形での学習支援を開始する。
- (2) 平成26年度までは紙媒体のみでの対応を行っていたスペース利用申込みを、Web利用申込みシステム（学内システム）を導入することで、ニーズに合わせた利用相談と対応を可能とし、より有効なアクティブラーニングの展開と活用事例の蓄積を行う。
- (3) 部局を横断し利用促進のイベント、ガイダンスを継続的に実施し、雄飛館ラーニングコモンズのより一層の利用促進と本学学生および教職員へのアクティブラーニングの浸透を図る。
- (4) 平成26年度に引き続き、英語自学自習システムのICTサポートの窓口として支援員を1名配置し、対応を行う。さらに、英語自学自習システムの利用促進のために、ラーニングコモンズにおいて利用説明会、勉強会などを実施し、学生の主体的な学びを支援する。

- (5) 平成 26 年度に引き続き、日本語 / 英語ライティング、プレゼンテーションに関する学習支援サービスの専門職員を配置し、個別相談対応を展開する。
- (6) 雄飛館ラーニングcommonsにおいて利用ニーズの実態把握調査を実施し、施設改善と学内におけるアクティブラーニング型授業のより一層の浸透を図る。
- (7) ラーニングcommons学生スタッフによるアクティブラーニング型のイベント企画の実施を支援し、学生自身が主体的に学ぶ機会の増加を促進する。
- (8) ライティング・プレゼンテーションへの学習支援のニーズの高さから、各学期に週一日程度を目標にワークショップを実施し、正課外学習の機会を作り、かつ主体的な学びへの意識づけを図る。
- (9) 本学ですでに展開されている学習支援の総合的な窓口となり、学生が円滑に支援を受けることが可能となるよう他部署との共同イベント開催や、活動案内などを雄飛館ラーニングcommons館内で実施する。また、平成 28 年度にオープンする新 2 号館グローバル・ビレッジに向けた英語ワークショップの運営支援を通じ、新 2 号館グローバル・ビレッジとの連携を展開する。
- (10) 平成 26 年度に実施したアクティブラーニングセミナーと同様に、雄飛館ラーニングcommonsにおける学内向けアクティブラーニングセミナーを実施する。学外者との連携によるイベント企画や、PBL 型授業・双方向の授業スタイルの浸透を図る。

8.4 総括

以上が、各 PT の次年度の実施計画である。次年度の外部評価委員会の開催までに、これらの事業計画を実行に移し、本学学生の学習活動を充実させ、学習効果を引き続き高めることで、4つの人材像の実現、理系産業人の育成を目指す。